

指導・支援体制の大きな変革期を迎えて

東京都公立学校情緒障害教育研究会会長

国立市立国立第二小学校長 小林理人



◇特別支援教室制度の実施

中学校の特別支援教室制度を円滑に導入するためのガイドラインが公表されました。移行期間を経て、全都の小学校で実施されている特別支援教室を活用した巡回指導が、平成三十三年度までには全ての中学校で実施されることになり、九年間の連続した指導・支援体制が整うこととなります。

このような、東京都の自閉症・情緒障害教育における指導・支援体制の大きな改革期を迎え、昨年度は「共生社会の形成のために果たす学校教育の役割」を研究テーマとする全国情緒障害教育研究協議会（全情研）五十周年記念大会を東京で開催しました。そして、サブテーマを、インクルーシブ教育システムの構築を進めている教育現場のニーズを踏まえ、「自閉症スペクトラムを中心とする特別支援教育における指導者

の専門性」として、講演会と分科会を中心とした研究大会が行われました。大会当日は、全国から特別支援教育に取り組んでいる多くの実践者が参加し、どの分科会でも熱い議論が交わされました。研究大会の準備や運営のために時間と労を惜しまずに関わっていただいた東京都公立学校情緒障害教育研究会（都情研）の委員の皆さんに心から敬意を表するとともに、感謝いたします。

◇新しい学習指導要領への移行

さて、新しい学習指導要領への移行期となり、本年度から教科書の対応を要するものではない内容については新しい学習指導要領に基づいた指導が行われています。学習指導要領総則の解説書には、障害のある児童・生徒の指導に当たって配慮することとして、「個々の児童・生徒に対する配慮等の必要性を共通理解

本誌2ページ～6ページ

平成三十年都情研定期総会記念講演（抄録）

「作業療法と発達障害のアセスメント

感覚や運動の視点からの実態把握と指導について」

（神奈川県立保健福祉大学大学院教授 笹田 哲先生）を掲載しています。

し、指導に当たって連携に努めること」などが示されました。これは、共生社会に必要な資質・能力を育てるための事項であるとともに、私たち自閉症・情緒障害教育に携わる教師に求められていることです。

◇都情研への期待に込めて

昨年度、本会が行った実態調査では、東京都の自閉症・情緒障害教育に携わる教員の約八割が経験年数五年未満であることや、特別支援教室での支援を必要とする児童・生徒の数が急激に増加していることが報告されています。平成三十三年度に本格実施となる義務教育九年間の特別支援教室体制の指導で成果を上げるためには、子供の指導に携わる私たちのスキルアップは当然のこと、子供の成長に関わる関係者の行動連携の「質」を高めることが欠かせません。そして、東京都における自閉症・情緒障害教育の拡充発展を図ることを目的に活動する本会の存在と役割は今後益々大きくなります。

そこで、渡辺秀貴前会長を中心に

築いた組織と子供の幸福を願う本会の「魂」を基盤とし、各ブロックを統括する副会長の校長先生、そしてブロック担当の校長先生方とともに東京都の自閉症・情緒障害教育を牽引する人材育成を進めていきます。

結びに、企画運営本部及び各ブロックの皆さん一人一人の主体性と団結力が、本会の活動の原動力となることは言うまでもありません。会員の先生方が、「本会の研究・研修活動に参加してよかった」と実感でき、そして、全ての子供たちが安心して自分らしさを発揮し、未来に向けての夢や希望をもつことができる教室、学校の実現を目指して会長としての務めを果たしてまいります。

都情研会報誌「みちびき」は、情緒障害教育等に関する情報を広く教員の皆様にお知らせする会報誌です。通常学級担任の皆様にもコピーして配布していただけます。ようお願いいたします。

（広報担当）

# 平成三十年度都情研定期総会記念講演（抄録）

## 「作業療法と発達障害のアセスメント」

感覚や運動の視点からの実態把握と指導について」

神奈川県立保健福祉大学大学院教授 笹田 哲先生

講演では、子供たちの身体と学習との関係について分かりやすくお話ししていただきました。紙面に限りがあるため、お話のかなりの部分を割愛せざるを得ず、誠に残念です。それでも、とても示唆に富む内容ですので、最後までお読みいただき、今後の指導に生かしていただければと願っています。（広報担当）

### 一 子供たちの身体と学習意欲

通級や特別支援教室の子供たちは、「コミュニケーション」が大きな課題ではありますが、身体の使い方が非常に不器用な子供たちもいます。こうした点について、作業療法の視点からどのような形で取り組んでいったらよいかについてお話しします。

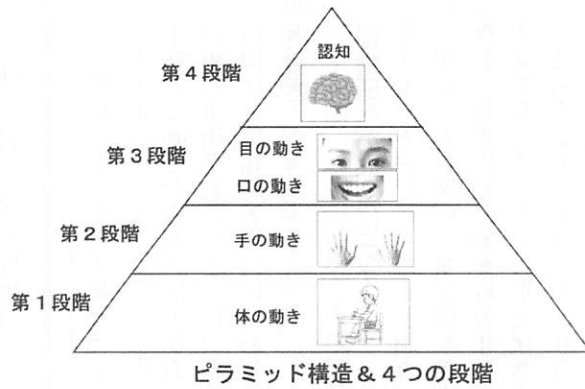
例えば、目の使い方や視線が合わない。相手に顔を合わせるために身体の体勢を相手の方に合わせる事がうまくできない。座位姿勢がすぐに崩れる。あるいは何かやろうとすると「疲れた」とすぐに座り込む。

そのような所作を併せもっている印象があります。これは脳性麻痺あるいは運動障害ではないでしょうか。と感ずる先生も多いのではないのでしょうか。何か気になるのだけどもどこを指導したらよいのだろうかとか、明らかに気にはなるがどこでどのように関わっていければよいのだろうかかと考えると、やる気がなく見えたり、意欲が低く見えたり、あるいは自己肯定感が低かったりすることがあるので、気持ちの問題だと思われることがあります。面倒くさいとか、嫌だとか、かんしゃくを起したり、なかなか一つ一つの課題や学習に取り組めないことがあるというのは、精神面だけではなく、身体の使い方、姿勢もありません。転びやすかったり、姿勢が崩れやすかったり、お友達との距離感が下手であったり、もちろん学用品を含めた指先の不器用さがあつたりします。自分の身体の中心軸や座標軸が弱く、小さなできないことが積み重なって学習面に悪影響を及ぼしていると思えます。そうすると、や

ろうとしなくなったり、意欲が下がったり、負のスパイラルに陥る様相が見られます。ですから、身体にも目を向けていく必要があると思えます。

### 二 体の使い方と動作。ピラミッド

「気になる動きを紐解く鍵」についてお話しします。ピラミッドのような図式を描きながら、四つのブロックに分けて子供たちの学習の動きを捉えていきます。



第三段階のところにも目を向けていく必要があります。第三段階は目の動き、口の動きも入ります。第二段階は、指の動きです。そして、一番下の第一段階は、体の動きや姿勢、体の構えです。全て動きと捉えようと、第四段階の認知も考える動きです。動きが単に動作や関節の動きだけでなく、非常に意味が深く学習の根幹になっていると思います。

評価やアセスメントをして気になる部分、あるいは今までやってきた指導で変わらない、伸びないといった部分があるときに、これらのところにも着目してもらえるとよいと思います。例えば第一段階だと、首の動きや体幹、それから骨盤の動きを見ることも大事です。それから下肢やバランス反応、姿勢を保持する力、椅子に座っている座位姿勢を見ます。保ち続けるということが非常に大事です。好きなきに座って、好きなきに立つということではなくて、決められた時間座り続けるということが第一段階です。

第二段階では、それぞれ右手、左手を分けて見るとよいです。右手の握りの機能、つまみ機能を見ます。コンパスやリコーダー、定規、ハサミといった学用品がうまく使えない、使いたがらないといったような場合には、握りの機能やつまみの機能はどうかを見ます。つまみの機能は指先の腹を使うもので、握りは掌全体を使う動きです。

第四段階のところ「認知」ですが、ここは学習の中核になる部分です。つまり、第四段階は、考えたり、自分で発言をしたり、漢字や計算などを覚えたりするところです。第四段階がフル稼働するためには、第一

手首もぜひ見てもらいたいポイントです。右・左とそれぞれ見ていきます。片方ずつ見たら、最後に両手動作があります。両手をうまく使えているか、左右を協調的に使えているかということですが。

第三段階では、目のところ、口のところを分けて見ます。目のところは、一つは視力の問題があります。これは目の問題です。眼球の中にあるレンズ体の収縮の状態によります。二つ目は目の外側の眼球運動です。眼球運動は目を素早く動かすことです。視力と眼球運動を混ぜて見ずに分けて捉えてほしいです。そして、三つ目が二つの目で見ているかどうか、片方で見ているか、目を細めているかを見ます。両眼視機能という言い方をしますが、これがあから奥行き感や距離感を捉えることができます。ボールを捕ったり、跳び箱で踏み切り板のところに足を合わせたり、あるいは動かないように静止したまま立ち続けたりするなど、両眼視機能が影響してきます。

口の機能については、よだれがよく出るか、活舌が悪いかなどを見ます。発声や鍵盤ハーモニカ、リコーダー、歌を歌うことが関係してきます。呼吸の浅さや疲れやすさ、給食の問題もあると思います。口腔機能と言います、口の周りの筋肉や舌の動きです。これも第三段階と捉えます。

そして第四段階は、意欲や記憶の問題、注意力、ワーキングメモリーです。ここについては、WISCやK-ABCなどの検査があるので、データとして把握できる部分もあります。

ボデイイメージについてはです。ボデイイメージは、先生や友達の動きを見て動きを学んだりやり方を覚えたりするとき、自分の頭の中や身体の中にある地図のようなものです。これを見ると、第四段階の気持ちの影響で学習がうまくいかないか、あるいは先生との指導のところがうまくいっていないのかが見えてきます。

機能面についてです。第二段階で、指先で鉛筆を持つなど学用品の操作に気になる点があったら、そこに課題があるということが見えてきます。具体的に言うと、握りの機能やつまみの機能、右手・左手はどうか、そして両手を使う両手動作はどうかという点で、評価できます。ただ第二段階だけではないです。子供たちを見ていると、指先が不器用だという第二段階が気になります。実は第一段階のところ、姿勢が崩れていたり、足を放り出していたりすると、指先の第二段階にも影響します。指先が効率よく働くためには安定した座りが必要です。座位姿勢は大事です。座りをセットしてあげる、整えてあげることが、指先がしっかりと機能するために必要です。

それから指先の不器用さに第三段

階が影響することがあります。「目と手の協調性」という言葉がありますが、ピラミッド構造で言うと、「第二・第三段階の連結する機能」と捉えることよと思えます。目の影響で指先がうまく使えないということも出てきます。見るこの問題があるからコンパスがうまくいかない。書字ではマスからはみ出るといふことがあります。第三段階の眼球運動や両眼視機能というところがうまくいかないことが影響することが分かっています。だから、指先が不器用な場合、もちろん指先の第二段階を見てほしいですが、第一段階の問題はないか、それから第三段階の問題はないかと、一つ一つ見てほしいです。指先が不器用だから指先のプログラムのやろうとということだけでなく、姿勢や体の構えはどうか、骨盤の位置はどうか、左側に傾いているかなど、いろいろなことを見る必要があります。そして、第一・三段階の影響が、第四段階の「失敗した、できない、嫌だな、やりたくない」という意欲の低下につながってしまいませんか。第一段階がよくなってきた結果、第二段階の指先の操作性が高まり、「できる」という自信がついて、通常学級でうまくできるようになります。ピラミッド構造をツールとして使うことよと思えます。

### 三 書字について

書字もピラミッドに置き換えて見

るとよいです。第一段階の姿勢か、第二段階の鉛筆を持っている手か、第三段階の目の使い方か、それとも第四段階の覚えたり考えたりするところかと、ピラミッドと重ねて見てみるとよいと思えます。

通常学級では特に約四十五分間座り続けるということが求められているので、座るといふことは座り続けるということですが、姿勢が崩れやすい子供にとってはこのところがうまくいかない、第二段階の指先ましてや第四段階までいかないです。椅子に寄りかかっていたり、集中力が切れてきたりします。

そこで、書字をピラミッドに置き換えて見ます。第二段階は鉛筆を持つ手や紙を押さえる手、それから消しゴムで消すなどの動作です。第三段階の見るとは、黒板を見たりノートや教科書を見たりすることになるので、遠くを見て近くを見ることが遠近感の調整をリアルタイムで行うということですが。第一段階と第三段階の連結は、首の動きが絶えず入ってきます。首を固定して書字をやるうとするとほとんどうまくいかなくなります。目も使いながら首も動かすという第一段階と第三段階の連結が必要になります。体の動きが不器用な子供は、この連結がうまくいかない場合があります。目は動かせる、首も動かせる、ただ目を動かしながら首も動かすということになるとうまくいかなることがあります。

す。できないということではありませんが、とても稚拙さが出てくることがあります。ずっと下を向きつ放しだったり、顔を上げて目線をなかなか合わせられなかったりします。そこに、第一段階の姿勢が重なり、その上指先の動きがあつたり、漢字のつくりやへんを覚えたり計算したりしなければいけないということがあります。これらをリアルタイムに無意識でやって学習してきます。そのように、第一・第二・第三段階のところがうまくいかない子がいて、単に記憶や集中力といった第四段階のところだけが問題ではないということなのです。姿勢や鉛筆の操作、見るこの問題、そしてそれらを連結させなければいけないというところがうまくいかない子供たちがいるのです。

#### 四 姿勢へのアプローチ

姿勢が崩れやすいなら、そこを高める運動プログラムを入れていきます。それは、腹筋や背筋を鍛える筋トレでは変わりません。体の傾きを入れて、バランスを養って姿勢を直すようなプログラムです。例えば、席に座っている状態でできることとして、「姿勢セット法」があります。体をサンドイッチにしてグッと起こしてあげます。ポイントは骨盤で、骨盤を起さなければなりません。骨盤を立てるという意味です。骨盤が寝た状態でただ背筋だけ伸ばして

も、またすぐに丸くなるので、骨盤を立てることが大切です。単に声かけだけでは直らない場合は、こうした身体ガイドを入れていってほしいです。「これがよい姿勢だよ」と第四段階の認知にフィードバックしていくことが大事です。よい姿勢を子供の体に覚えさせていきます。



それだけでは足りないのが、特別支援教室では、バランスを養う遊びを体験する時間をつくってあげるとよいと思います。

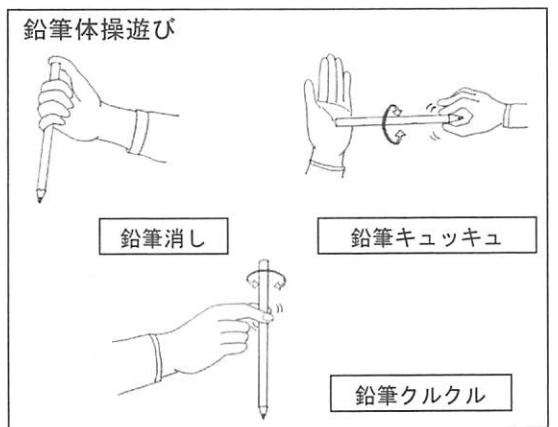
例えば、「あぐらはずもう」です。子供があぐらをかいて座り、その子を前や後ろ、横から押して、倒れないように姿勢を保持する遊びです。他に、やじろべえのように立つ遊び、空になったペットボトルに何かを入れて振る遊びもあります。振ることは第二段階の要素もありますが、姿勢の保持力を養うことにもなります。振っているときに、指先を見るのではなく、体幹が伸びているか

や体の中心軸がブレてないか、背筋が伸びているか、骨盤が起き上がっているかを見ます。または、線の上を歩く「バランスレンジャー遊び」という取り組みもあります。これは姿勢調整にはとてもよいです。バランスレンジャー遊びは、第三段階の目の動きも入ってきます。線を見ようとして下を向いて首を曲げるので、書字のときに首を下向きに曲げて見る体勢につながります。この体勢をしっかりとつくとあげることにつながってきます。

第一段階と第三段階のところ弱いので、それに対応するためにこのプログラムを入れて、最終的には書字につなげていきます。これをやりながらバランスや姿勢保持力、目の使い方を高めていきます。

#### 五 指先の動きについて

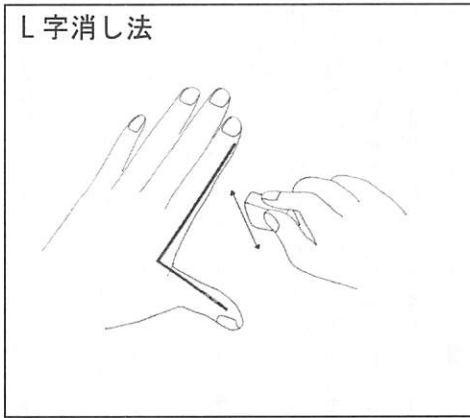
次は、第二段階を見ていきます。鉛筆の「先端持ち」についてです。鉛筆の先端を持ってしまつと、親指の関節がぐつと曲がってきます。そうなる鉛筆の芯が見えなくなります。見えなくなるから斜め見をします。斜め見をするとまた姿勢が崩れるということになります。第二段階の姿勢の崩れが第一段階、そして第三段階にも影響します。これは早めに直すことよと思えます。先端を持たないように、できたら削り部から指一つくらい空けたところを持つように指導します。



「先を持たないように」と言っても先端を持つようでしたら、鉛筆体操といった遊びのようなものを入れるとよいと思えます。鉛筆消し、鉛筆キュッキュ体操、鉛筆クルクル体操などです。授業の前に少し指の体操をやつて書字に入り、姿勢セットをするという組み合わせがよいと思えます。それらを少しでも入れるだけで、子供たちは積み重なってきますので、こういうところで親指の動きを高めていきます。

また、運筆ワークを入れるとよいです。正しい鉛筆の持ち方で直線や曲線をなぞります。斜め線や正方形、曲線を入れていきます。片仮名や平仮名、数字は斜め線が入ります。これをなぞっていくということを最後のまとめでやっていきます。書字でもう一つ大事なことは、消

しゴムで消す動作です。うまく消すことができないと黒ずんだり紙が破けたりします。その場合には、紙を押さえる手をL字型にしてあげるとよいです。L字にして、しっかりと紙を押さえて、それで、L字の上のスペースのところで消すようにするのがいいです。子供は、手が落ちてしまっ



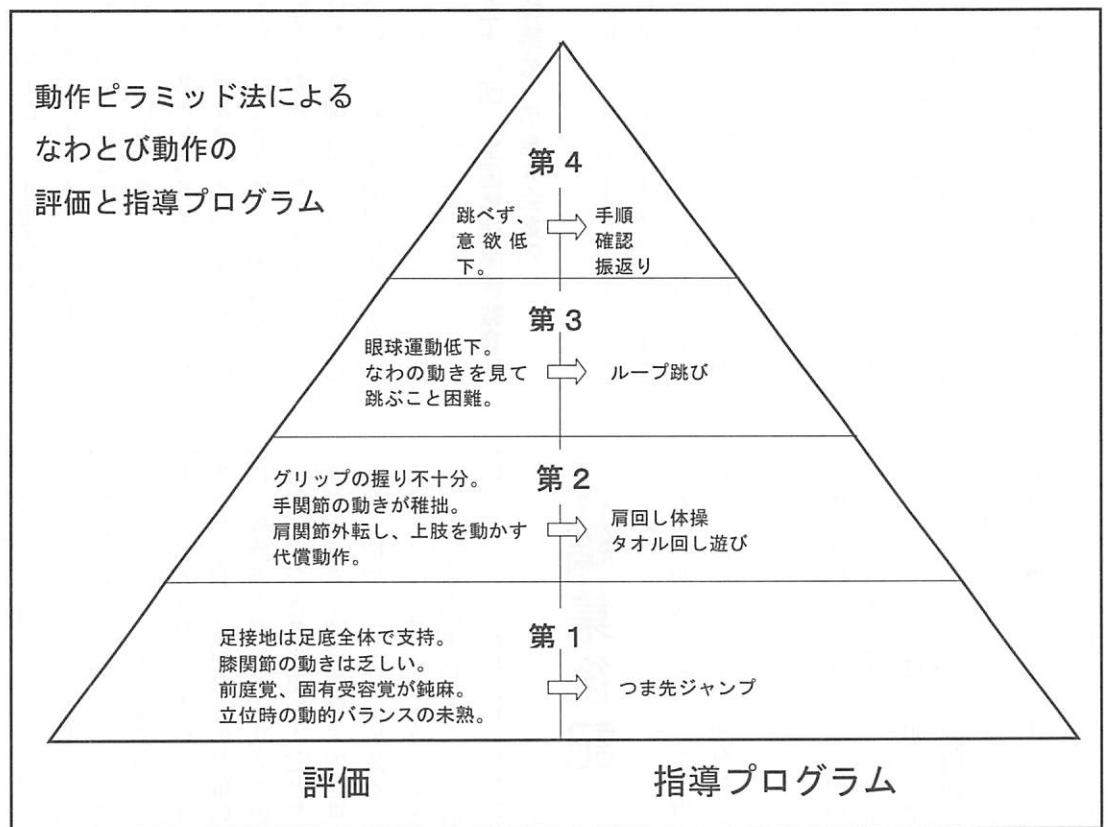
六 体育について

体育についてどう捉えていったらよいのかをお話しします。例えば、縄跳び。縄跳びのピラミッド構造には、真ん中に線を入れていまして、

左側が評価した項目、右側が指導プログラムというふうに捉えたピラミッド分析です。

縄跳びがうまくいかないというところで評価して、左側に書きます。第一段階、足の接地は足底全体だから、ドンドン支持になっていきます。それから跳ぶときに膝を使っていなくて棒立ちになっています。それから前庭覚、固有覚ですが、バランス感覚や、筋肉の感覚が弱いんです。だから、タラタラしているし、フラフラしているといったように見えます。それから、立位時の動的バランスがやはり感覚の影響もあって未熟だという評価もしています。第二段階は、縄を持つグリップの握りが不十分です。それから、主関節の動きが稚拙です。手首がうまく回せていないということなんです。それから、肩関節が外転してしまって、大振りになっています。それで上肢まで動いてしまいます。ここは第二段階に入れたらいいと思います。それから第三段階のところは、眼球運動が低下しています。縄を見ながら前も見ながらという目の使い方がうまくいっていません。そして、第四段階は、跳べないということ意欲が低下しています。

そこで、右側の指導プログラムを見ていきます。第一段階の問題に対しては、つま先ジャンプというプログラムを入れます。第二段階には、肩回し体操、それからタオルを使っ



たタオル回し遊びということ、縄はまだ使いません。第三段階はフラフープで跳ぶプログラムです。そして、第四段階は、手順、確認、振り返りですが、それぞれ、その都度「今できているよ」「上手にできたね」

というフィードバックをしっかりと入れていきます。「今やってみてどんな気持ちだった」といったようなフィードバックも入れていきます。縄跳びができるければ縄跳びを使っ

が一つ考えられますが、特別支援教室に通ってくる子供たちは縄だけの練習ではうまくいかないこともありそうです。そういうときに、このようにそれぞれの各段階のプログラムを立てていきます。順番はその子にもよりますから、決まったフォーマットみたいなものはありません。その子の様子を見ながら、まず第一、第二、第三段階というようにやってみてうまくいかなければ、フィードバックして、第二段階に少しウエイトを置いてやってみようなど修正します。決まってこの通りやりなさいということはないです。プログラムをうまく組み合わせ、そこからアレンジしていきます。だから、あまりパターンにはめないということも大事だと思います。こういうことを組み合わせながら、小さな「できた」をつくらせて、「じゃあ、ちよつと縄でも跳んでみようかな」という時間をつくらせてほしいと思います。

**七 まとめに**

まずはピラミッド特徴を知ってほしいです。書字のピラミッド特徴、長縄のピラミッド特徴、二重跳びをするためのピラミッド特徴というように、それぞれのピラミッド特徴があります。そして、評価していきまそうすると、ここからやってみようかなというところが見えてくると思います。そうすると、個別指導計画の中にリンクできるので、系統

立てて、こういう見方や見立てでやったというように反映するとよいと思います。そして、小さな「できた」をつくらせて、チャレンジプログラムを作ってください。そこが特別支援教室でできることなのではないのかなと思います。個別学習の時間も増えますから、机上のプログラム、体育的なプログラムをうまく織り交ぜながらやって、そして、集団の参加、対人関係、言葉、体を使うところの視点をに入れていくといいと思います。運動という体育的な運動ではなくて、「体を賢くする」とか「できる体」ということを目指してほしいです。小さな「できた」をつくるような形で取り組んでいただければと思います。

**第三回都情研究大会  
(南ブロック大会)**

日時：平成三〇年八月三日（金）

午前九時三〇分～午後五時

会場：日本大学文理学部

百周年記念館アリーナ

(下高井戸駅から徒歩八分)

講師：水野 薫 先生

(Space Zero PDD)

心理教育研究所所長

渡辺 圭太郎 先生

(西東京市教育支援アドバイザー)

ザー)

内容：各地区の指導実践報告

及び水野薫先生の講演

世田谷区教育委員会並びに日本大学文理学部のご協力により、日本大学文理学部百周年記念館にて、第三回都情研究大会を開催いたしました。運営担当の南ブロックを除く四地区の指導実践報告（一地区は中学校）を中心に、今年度の研究テーマ「情緒障害教育における障害特性に応じた自立活動について」特別支援教室等における児童・生徒のアセスメントと専門的な指導」について考えていきます。当日は千人以上の参加が見込まれます。円滑な運営にご協力をお願いいたします。

なお、詳細はホームページにてご確認の上、必ず事前申し込みをさせていただきます。

**第五十一回 全国情緒障害教育研究協議会 広島大会案内**

平成三十年九月十五日～十六日の

二日間、広島市のJMSアステール

プラザにおいて標記の大会を開催します。本大会は第二十五回日本自閉

症協会全国大会と共催で開催します。大会スローガンは「つながろう

や わかりあおうや 平和のまち

広島じゃけえ」です。広島には、平

和への熱い想いがあります。そして、

この「平和への想い」を、「次世代

につなぐ」「全国につなげる」強い

願いがあります。自閉症スペクトラム

の人たちが幸せに生活できる社会

を目指して、広島から熱い想いと強い願いを発信します。

大会プログラムは、記念講演とシンポジウムです。講演は、広島市出身で元陸上選手の為末大氏を講師にお招きします。シンポジウム1は「樂しめる療育をめざして」自閉症特性を伸ばす子育て」、シンポジウム2は「樂しさのある学校へ」毎日笑顔で過ごせる学校」、シンポジウム3は「樂しく生きる地域でひとりひとり大切」というテーマです。日本自閉症協会との共催の大会は、保護者と教師や支援者が直接的な対話ができる貴重な大会となります。保護者や関係機関との連携という教育現場のニーズに応える大会になると思います。詳しくはMPOで。

(主催 研事務局 有澤直人)

**編集後記**

広報に関するご意見、ご感想がありましたら左記までお寄せください。

編集・発行 企画運営本部広報担当

各ブロック 広報係

世田谷区立明正小学校

(廣田智仁)

03-3415-5597

印刷 (株)ワールドミーティング